

UKT だより——開 所 式

林 左 絵 子*

イギリスがセンチ波より短い電波域での遅れをとり戻すべく、ハワイ島はマウナ・ケア山に建設中であったサブミリ波帯用電波望遠鏡が完成し、このほど開所式が行なわれた。この望遠鏡の名称はイギリス人であり電磁波の研究の先達であったマクスウェルに因んで James Clerk Maxwell Telescope (J.C.M.T.) となっている。サブミリ専用機としては 100 m と離れていないお隣さんのカルテク 10 m 鏡に次ぐもので、この2つが山頂より少し下った盆地にあるため、そこは「電波の谷」と呼ばれている。この J.C.M.T. と、山頂の赤外線天文台 UKIRT (United Kingdom Infrared Telescope) とを併せて、エディンバラ王立天文台が運営にあたるが、出先のオフィスはハワイ島の海辺のヒロ市にある。ハワイの2つの観測所を取仕切るのはマルコム・スミス、電波観測所の責任者はエイドリアン・ウエプスター、対応するエディンバラの責任者はジョスリン・バーネル(パルサーの!)である。

さて開所式当日の4月27日、ヒロの天気は風強く、小雨とあまりよろしくない。もっともヒロとしては普通のことだが。午前9時スタッフが三々五々オフィスに集まって来る。夫人同伴の人もある(旦那同伴はいない)。観測所の主だった人々は、イギリス・オランダ・カナダの文部省にあたる場所のお役人や天文台の幹部、ハワイ大学の天文研究所の幹部、ハワイ州やヒロ市の偉いさんとの挨拶に忙しい。裏方グループの秘書が名簿片手に走り回る。気楽なのは、我々ガイジンやポストドクに相当する連中。もっとも4月30日締め切りの観測プロポーザルを書いていたデントは気楽ではなかったかもしれない。

11時頃から4台の車に分乗、まずマウナ・ケア中腹の観測者用宿泊施設に向かう。最後の急な坂でヒロのホテルからのバスが立ち往生、本国からはるばるやってきたご年配の人々が歩いて登っていた。これは4輪駆動車の荷物室に口うるさい荷物を詰め込んだり、中間施設とのビストン輸送で解決。このあたりの高度から天気が良くなってきたのが、幸いであった。その中間施設で、お祈りのあと昼食。よくまあ、あの人数を満足させられたものと感心。ざっと150人であったとか。デザートのカキに電波望遠鏡とドームが描かれていた。

その先は4輪駆動車だけで山頂へ。他の観測所の車も

動員されていた。「電波の谷」に到着したころは、かなり青空が広がってきた。さてドームの中、望遠鏡に近接してコントロール室のある2階に詰め込まれて、式典が始まった。ハワイ州知事(代理)、エディンバラ王立天文台長らのスピーチに続いて、ハワイ風のお祈りと、日本でいえば御祓いのような儀式、これは大きな葉を使って水をまいていくもの。建設グループから運営グループへの鍵の引き渡し、エディンバラ公フィリップ殿下による序幕と続き、最後に望遠鏡とドームを動かすデモンストレーション。ドームの覆いを開けて全体を水平軸の回りに回転させたときには、あまりにスムーズな動きに、風景の方が動いているかのようであった。そのスピードにも感心した。ただし後で内緒できいたところ、コンピュータによるコントロールがうまくいかず、手で制御したとか。

この間、高度4300mの希薄な空気のため、具合が悪くなった人もいて、酸素ボンベを使った手当を受けていた。そもそも、あんな狭いところに150人もひしめき合っていたのだから。

さてセーターに毛糸の帽子、草木の全く無い乾燥した世界から、小雨降る熱帯雨林のヒロに戻って、次はナニロア・ホテルでのディナー。この場合、ハワイ流の正装であるから、男性はアロハ、女性はムームー。といってもよく見掛ける原色のものではなく、それらしいやはり特別のものがある。受付で名札をもらい、約1時間ほど飲み物片手に自己・他己紹介。ハワイに以前からいるスタッフとその同伴者が、客どうしを引き合わせるようにしていた。地元からの参加者には、オフィスの設計者をはじめ、日系人が多いようだ。

カルテク10mのトム・フィリップスやジョスリン・キーンと話をした。日本の技術水準によほど強い印象をもっているらしく、サブミリでの最も良いミキサースの材料をNECがもっていると。野辺山の活動についても関心が深い。

そうこうしているうちに、皆様あちらへとテーブルに案内される。10人ほどが1組で座る。広いホールを埋めつくした人数はざっと300とか。フルコースの食事中、まわりの人と話したところ、1組はオランダのエレクトロニクスの技術者(と奥さん)、1人はドーム工事に携わった人、別の1人はオランダの天文学者でこの夏から1年間ハワイに来るとのこと、そして1組はハワイに20年という夫婦であった。この最後の夫婦以外は、英

* J.C.M.T. Saeko-Suzuki Hayashi: United Kingdom Telescopes—Opening Ceremony of J.C.M.T.

語が多少アヤシイ。

最後のコーヒーが終わったところで、来賓のスピーチが始まった。ここでやっと真打ち登場。建設担当の技術者の苦勞話と、エディンバラ公フィリップ殿下の“Magic Muchroom/Giant Trash Can”というご感想。さらにハワイ大学のドン・ホールによる「マウナ・ケアの国際化」の話では、近い将来に日本が参加することが述べられた。

しかし何といっても印象深いのは、このあとのフラダンスのエキシビジョンであった。観光のために変形したのではなく、伝統的なスタイルで、火山の神に祈ったり、古代の王を称えたりするもの。アイヌの、熊の踊りを思い出した。

ここで残る疑問は、ヒロの市長がなぜ一日中つきあうほど、この観測所を重視するのかということである。エディンバラ公の出席は、ホノルルで開かれた野生動物保護の団体の総会への総裁としての出席と引き続いており、またイギリスの国威発揚の観点もある。地元の肩入れは、なぜだろう。サトウキビと観光だけでは、市の発展がおぼつかないからか。天文台群の城下町としての未来に期待しているのだろうか。

最後に、ちょっときいた話。この冬に本国の会議で観測所の運営について議論が行なわれた時、日本からの数多くの（そして優れた？）観測申し込みと、カナダの突然の参加に悩まされた連中が Japanese Canadian Millimetre Telescope のあだ名を呈したとか。

日本学術会議だより No. 6 より抜粋

日本学術会議会員選出制度

日本学術会議は、210人の会員をもって組織されているが、その会員は次の手続きにより選出（推薦）される。現在第14期会員（任期：昭和63年7月22日から3年間）を選出（推薦）するための手続きが進められているところである。

〔手続概略〕

1. 会員の候補者を選定し、及び推薦人（会員の推薦に当たる者）を指名することを希望する学術研究団体は、日本学術会議に登録を申請する（昭和62年6月30日締切り）。

申請する場合には、その学術研究団体の目的とする学術研究の領域と関連する研究連絡委員を届け出なければならない。届け出られた研究連絡委員会が『関連研究連絡委員会』（3参照）である。

関連研究連絡委員会により区分された学術研究の領域（以下「学術研究領域」という）ごとに、会員の候補者及び推薦人を届け出ることになる。

2. 日本学術会議会員推薦管理会は、この申請を審査し、その学術研究団体が所定の要件を満たすものであるときは、関連研究連絡委員会その他の事項を登録する。

登録された学術研究団体が「登録学術研究団体」である。

3. 登録学術研究団体が届け出た関連研究連絡委員会が複数あるときは、日本学術会議会長は、登録学術研究団体の意見を聴いて関連研究連絡委員会を限定（指定）する（11月30日までに指定）。

4. 登録学術研究団体は、その構成員である科学者のうちから、会員の候補者を「学術研究領域」ごとに選定し、日本学術会議に届け出る（昭和63年2月1日締切り）。

5. 日本学術会議会員推薦管理会は、届け出られた会員の候補者が会員の資格を有する者であるかどうか認定する。

6. 登録学術研究団体は、その構成員である科学者のうちから、推薦人を「学術研究領域」ごとに指名し、日本学術会議に届け出る（2月20日締切り）。

7. 推薦人は、「学術研究領域」ごとに、日本学術会議会員推薦管理会が会員となる資格を有すると認定した会員の候補者のうちから、会員として推薦すべき者及び補欠の会員として推薦すべき者を選考決定する（5月中旬～6月上旬）。

8. 推薦人は、会員として推薦すべき者及び補欠の会員として推薦すべき者を、日本学術会議を経由して、内閣総理大臣に推薦する（6月中旬）。

9. 内閣総理大臣は、その推薦に基づいて、会員を任命する（7月22日）。